

川井弘子ソプラノリサイタル

～ 憩いと愛をはこぶⅡ Ruhe und Liebe zu uns tragen Ⅱ ～

[ピアノ] 濱野基行

2026 年 9 月 18 日 (金) 19:00 開演 【横浜】 フィリアホール

2026 年 10 月 18 日 (日) 15:00 開演 【京都】 バロックザール

Program Note 川井 弘子

ヘンリー・パーセル

Henry Purcell (1659 London-1695 London)

Come all ye songsters of the sky

さあ、お前たち、空の歌い手よ セミオペラ「妖精の女王」より

パーセルは、バロック時代のイギリスを代表する作曲家。国際貿易の中心地となったロンドンで活躍。王政復古 (1660 年)、疫病 / 腺ペストの流行 (1665 年)、ロンドン大火 (1666 年)、名誉革命 (1688 年) など激動の時代に、わずか 36 年の生涯で 800 以上の曲を残した。

宮廷では音楽や演劇が盛んになり、声変わりの前まで礼拝堂聖歌隊で歌い、18 歳で王室弦楽合奏団の作曲家、20 歳でウェストミンスター寺院のオルガン奏者として活躍。その音楽は、イタリアやフランスの影響を受けながら、独自のイギリス風を確立。宮廷や劇場文化の発展、教会音楽の質の向上に大きく寄与し、イギリス音楽が国際的に認知されることとなった。

Come all ye songsters of the sky,
Wake and assemble in this wood;
But no ill-boding bird be nigh,
No, none but harmless, and the good.

さあ、お前たち、空の歌い手よ、
目を覚まし、この森に集えよ、
しかしながら、不吉を歌う鳥は近寄るな、
絶対に、無害な、よき鳥たちだけが集うのだ。

シェイクスピアの『真夏の夜の夢』を元にしたこのセミオペラ『妖精の女王』は、親の意に反する恋人たちの行き違いと、妖精の王オベロンと妖精の女王ティターニアの不和を軸に進む。森に迷い込んだ若者たちは惚れ薬のせいで恋の相手を取り違い、混乱が深まっていく。

第 2 幕、ティターニアをもてなす妖精たちによる陽気な宴。その幕開けで、空の鳥たちに呼びかけて歌われるのが《Come, all ye songsters of the sky》。が、楽譜には“First Song”とだけ記されており、誰が歌うのかは示されていない。名もなき一妖精が代表して歌っているようだ。

その後、夜・神秘・秘密・眠りの精たちが次々と現れ、場を静めて女王を眠りへと誘う。眠るティターニアの目にオベロンが惚れ薬を塗ると、目覚めた途端、ロバの頭にされた職人ボトムに恋してしまう。物語の最後には恋人たちが正しい相手と結ばれ、オベロンとティターニアも仲直りして、幸せな結婚の祝祭とともに幕を閉じる。

ところで、ここでいうこの時代の妖精とは、背中に羽のある小さな精霊ではなく、森や自然を司る超自然的な存在全体を示す言葉だった。人間と同じ背丈で、伝統的な演出では威厳のある王族のような姿で描かれる。

Caro mio ben

いとしい私の恋人

Caro mio ben,	いとしい私の恋人、
credimi almen,	せめて私を信じておくれ、
senza di te	おまえがいなければ
languisce il cor.	心は衰え果ててしまう。

Il tuo fedel	お前の忠実な恋人は
sospira ognor.	いつもため息をついている。
Cessa crudel	むごくしないでおくれ
tanto rigor !	そんなにもつれなくしないでおくれ!

(作詞者不詳)

《Caro mio ben》は、恋人への切ない想いを歌ったイタリアの古典独唱小品（Arietta アリエッタ）。日本では高校の音楽の教科書に掲載され（私の時はそうだったが、今も？）、世界的に広く知られている。作曲はナポリ生まれで、中部イタリアのフェルモ大聖堂楽長を 1789 ? 91 ? 年から、亡くなるまで務めた（こちらはすべての資料が一致）、ナポリ楽派の流れを汲む G. ジョルダーニとされる（が、別の説もある）。

ナポリ楽派（Scuola napoletana）は、17 世紀末から 18 世紀にかけてナポリを中心に栄えた音楽の一大潮流で、当時のヨーロッパの音楽シーンをリードした存在である。のちのハイドンやモーツァルトにも大きな影響を与えた。美しい旋律線を何よりも重視し、いわゆるベルカント様式の土台を作り、オペラ・セリア（正歌劇）とオペラ・ブッフア（喜歌劇）という 2 つのオペラ様式を確立・洗練させたことが挙げられる。アレッサンドロ・スカルラッティが基礎を築き、その後ペルゴレージ、ドゥランテ、ピッチンニ、パイジェッロ、チマローザといった作曲家たちが続く。

ナポリには当時、孤児や貧しい子どもを収容し音楽教育を行う「コンセルヴァトーリオ（conservatorio、現在の音楽院の語源）」が複数あり、そこから優れた歌手や作曲家が数多く育ったのも大きな特徴だ。つまりナポリは当時、ヨーロッパ屈指の「教会都市」で、ミサをはじめ日常的に音楽を必要としていた。一方で、商業的な娯楽産業としてオペラ劇場が次々でき、貧しくても実力次第で音楽家になれる特殊な土壌があった。つまり音楽は身寄りのない子どもたちの「手に職」の一つだった。この上なく美しいのに、平易でさわやかな親しみやすさがあるのは、このナポリの街の当時の状況から来るのかもしれない。北イタリアしか訪問したことがない私は、なんだかイタリア南部は怖いイメージしかないが、当時は全く異なるのであろう。

With plaintive notes, and am'rous moan

嘆きの調べと愛の吐息 オラトリオ「サムソン」よりデリラのアリア

イギリス王室の重要な行事で、現代でもしばしばヘンデルの曲は演奏される。J.S. バッハと同じ年のドイツ生まれだが、生涯の大半をイギリスで活躍し、お墓もウェストミンスター寺院にある。幼少期からクラヴィコードとオルガン演奏に秀で、オペラに興味を持ち自由都市ハンブルクへ。

1706～10年イタリアに赴き、帰国してハノーファー選帝侯の宮廷楽長（Kapellmeister）になる（1710年）が、まもなくイギリスへ渡りオペラを上演。1727年イギリスの市民権を得る。声楽作品では母語のドイツ語よりイタリア語作品の方が多く、イタリアオペラで名声を築いた。しかしその人気が衰えると、1730年代よりオラトリオに軸足を移し、『メサイア』『サムソン』などの傑作を生み出した。

国籍を超えてイギリス音楽界の中心的存在となり、1759年にロンドンで没した、バロック期を代表する作曲家である。

With plaintive notes and am'rous moan,
Thus coos the turtle left alone.

嘆きの調べと愛の吐息をまじえて
ひとり残された山鳩は、このように鳴くのです。

『サムソン』の物語は旧約聖書『士師記』13～16章が出典である。怪力の英雄サムソンは、来る日も来る日も「愛していないのに愛していると言うのか、三度も私を騙した」と、本当に愛しているデリラに責められ、ついに力の秘密（髪）を明かしてしまう。デリラがサムソンを裏切る動機は、聖書ではお金（ペリシテ人領主からの報酬）である。捕らえられ、両目をえぐられた彼だが、髪が伸びて力が戻り、神に祈ることで、渾身の力を発揮。敵の神殿を引き倒し、しかし自分も共に死ぬ。1671年、ミルトン（John Milton 1608-74）は詩劇『闘士サムソン Samson Agonistes』で、デリラを聖書とは異なり「妻」と設定した。これを基にしたヘンデルのオラトリオ『サムソン』（1743年）でもデリラは妻である。

このアリア“With plaintive notes”は、誘惑の場面ではなく、妻デリラがすでにサムソンを裏切った“後”に歌われる曲で、「一人残された鳩」の比喻による嘆きの歌である。その裏切りの動機も金銭ではなく嫉妬・独占欲とされ、サムソンは「それは自分への本当の愛でなく、欲望のためだな」と言いきり、デリラの申し出を拒絶する。このアリアが、甘やかでも、この上なく爽やかで美しい音楽であるのは、男を誘惑する目的ではなく、ただ静かに嘆いているからだだろう。ところでこのオラトリオは、二人は相容れずお互いが強いまま別れるという不思議な結末を迎える。

一方、あの有名なサン＝サーンスのフランス語のオペラ『サムソンとデリラ』では、デリラは妻ではなく、サムソンがかつて拒んだ女性である。彼女はその拒まれたことに対する復讐に、有名なアリア“Mon coeur s'ouvre à ta voix”を歌い、まさに誘惑して怪力の秘密を聞き出そうとするのである。

La gita in gondola

ゴンドラに乗って

Voli l'agile barchetta
Voga, voga, o marinar,
or ch'Elvira mia diletta
a me in braccio sfida il mar.

軽やかな小舟よ 飛ぶように進め
漕げ、漕げ、船頭よ。
いとしいエルヴィーラが今
私の腕に抱かれて海に挑もうとしているのだから。

Brilla in calma la laguna,
una vela non appar,
pallidetta è in ciel la luna,
tutto invita a sospirar.

入江はおだやかに静まり水面は輝いて、
帆影ひとつ見えず、
空には青白い月がかかり、
すべてがため息を誘う。

この曲は「恋人と二人でゴンドラに乗り、夜の入江を漕ぎ出す」という高揚感と、月明かりの下での親密なムード、そして「ため息を誘う」が示す恋の切なさや甘さの情景を歌ったものだ。「バルカローレ（舟歌）」特有の、水面の静けさと胸のときめきを重ね合わせる構成になっている。つまり歌詞の内容そのものが、音楽形式のロマンティックな性格をなぞる形をとっている。

「バルカローレ barcarolle、伊：barcarola」は、もともとヴェネツィアのゴンドラの船頭（ゴンドリエーレ）が漕ぎながら歌っていた舟歌に由来する声楽・器楽のジャンルである。拍子は6/8や12/8といった複合拍子が多く（この曲は12/8拍子）、これはオールで水を漕ぐ揺れを音楽的に模している。テンポは中庸からやや緩やかで、伴奏には規則的な波のうねりのようなリズムパターン（低音部が拍子の頭を支え、その上を滑らかな旋律が漂う）がよく使われる。

曲想は穏やかで叙情的、しばしば夜や月、静かな水面といった情景と結びつき、恋愛・感傷的な雰囲気を伴うことが多い。19世紀にはヴェネツィアの実際の民謡から着想を得て、多くの作曲家が芸術音楽のジャンルとして取り入れた。オッフェンバックの歌劇『ホフマン物語』の「舟歌（二重唱）」、ショパンの「舟歌 嬰へ長調」やメンデルスゾーンの「ヴェネツィアの舟歌」と題されたピアノ曲など。

La promessa

約束

Ch'io mai possa lasciar d'amore,
no, nol credete, pupille care;
nemmen per gioco v'ingannerò.

どうして私にできようか愛することをやめるなんて、
どうかそんなことを信じないでくれ、いとしい瞳よ。
戯れにもあなたを騙したりはしないだろうから。

Voi sole siete le mie faville.
e voi sarete, care pupille,
il mio bel foco sin ch'io vivrò.

あなただけが私の情熱、
そしてあなたこそが、いとしい瞳よ、
私の光明となるだろうから、私が生きているかぎり。

Pietro Metastasio

ピエトロ・メタスタージオ

この詩はもともと、ピエトロ・メタスタージオ（Pietro Metastasio 1698-1782）によるオペラ台本『ペルシャ王シーロエ Siroe, re di Persia』（1726年初演、初演時の作曲はレオナルド・ヴィンチ）中の一部。“Ch'io mai vi possa lasciar d'amare”は第3幕、男装して身分を隠しているカンパイア国（現在のインド・カンパイ地方）の王女エミーラが、愛するペルシャの王子シーロエに向けて歌うアリア。エミーラは、シーロエの父親に自分の父親を殺されて復讐

に燃えていたが、ついに復讐を捨ててシーロエへの愛を貫く決意を固める場面。つまり男装の王女エミーラが、恋人シーロエに対して「私が決してあなたを愛することをやめるなどと思わないでほしい、たとえ戯れでもあなたを裏切ることはない」と誓う歌。ロッシーニはこの部分の詩のみを取り上げて、1830-35年『音楽の夜会 Les soirées musicales』という歌曲集の第1曲に作曲している。道理で、言葉も音楽も力強いはずだ。

興味深いのは、曲は全曲イタリア語であるのに対して、この歌曲集の名前『音楽の夜会 Les soirées musicales』がフランス語であることだ。当時ロッシーニはパリとボローニャの間を行き来していたが、1829年のオペラ『ウィリアム・テル』を最後に、作曲をほとんどしなくなっていた。

当時のヨーロッパでは、パリに限らずイタリア語で歌うことこそ声楽の最高峰とされ、貴族のサロンでもイタリア語の歌曲が持てはやされた。一方でこの曲集が実際に披露される場は、パリの社交界で流行していた「音楽の夕べ」というフランス的な催しの形式だった。そこでロッシーニは、歌詞と歌唱様式そのものはイタリアの伝統に忠実でありながらも、曲集全体の名称には、それが披露される社交の場を示すフランス語のタイトルを与えた、と考えられる。

19世紀前半のパリでは、オペラに出演したスター歌手が、その晩のうちに貴族や富裕層の私的なサロンに招かれて歌う、というのはごく一般的な習わしだったという。ロッシーニ自身も自宅でサロンを開いており、こうした場では、オペラの本公演では聴けない軽妙な歌曲が歌われていた。その記録ははっきりと残ってはいないが、実際、この『音楽の夜会』に収められた歌曲たちも披露されたかもしれない。

ところで、作曲家ロッシーニ（1792-1868）の76年の生涯は、かなり謎めいている。ウィーンでもロッシーニの音楽は人気があり、あのベートーヴェンもその人気に嫉妬したというエピソードがある。美男子であり、さっさと作曲をやめて、グルメに走った（晩年は太っていた？）こと。一方、気に入った詩（Il rimprovero __ Mi lagnerò tacendo della mia sorte 叱責__何も言わずにやつれ果てるだろう）には20回以上作曲してみたり。どうも幼少期の数多い引っ越しのせいで落ち着いて勉強ができず、詩に対する理解が深くなく、もっぱら感性で音楽をつけていたと言われている。しかしハイドンやモーツァルトといったドイツ音楽が大好きで、“ドイツ坊や il Tedeschino”というあだ名もついていた。音楽は底抜けに明るく、理屈抜きに身体から身体に直接伝わるかのようだ。

リヒャルト・シュトラウス

Richard Strauss (1864 München-1949 Garmisch-Partenkirchen 独)

リヒャルト・シュトラウス（1864-1949）は、後期ロマン派を代表するドイツの作曲家である。二つの世界大戦を経験し、私たちが生きている時代にも近い。ベルリンに留学していた若き日の山田耕筈は、シュトラウスに作曲を師事しようとしたが、叶わなかったらしい。シュトラウスの妻パウリーネは優れたソプラノ歌手であり、シュトラウスはピアノ伴奏を務め、彼女を通してソプラノの声を深く理解していたようだ。詩の言葉と身体性のある音楽が、ソプラノの声に自然に結びついた、南ドイツのなんともロマンティックな稀有な作曲家であると言えるだろう。

今日の6曲の中でも、“Morgen 明日になれば”は、二人の結婚のときに、シュトラウスがパウリーネにプレゼントした曲の一つだ。二人が見つめ合う静かな空気が私たちに時空を超えて伝わるから、音楽というのは素晴らしい。

ドイツ詩の訳は、音楽評論家でドイツ詩がご専門の船木篤也さんに今回もお願いできた。わかりやすく、情緒ある日本語が美しい。

Nichts, op.10-2

Nennen soll ich, sagt ihr, meine
Königin im Liederreich?
Toren, die ihr seid, ich kenne
Sie am wenigsten von euch.

Fragt mich nach der Augen Farbe,
Fragt mich nach der Stimme Ton,
Fragt nach Gang und Tanz und Haltung,
Ach, und was weiß ich davon!

Ist die Sonne nicht die Quelle
Alles Lebens, alles Lichts?
Und was wissen von derselben
Ich, und ihr, und alle? -- Nichts.

Hermann von Gilm

なにも 作品 10-2

きみたちは、言えというんだね、
ぼくが歌の国の女王だと思っている人のことを。
なにも分かっていないね、だってぼくは
きみらの中で一番、彼女のことを知らないんだ。

目の色について、ぼくに訊いてごらん
声の種類について、ぼくに訊いてごらん
どんな歩き方で、踊り方で、姿勢をしているか訊いてごらん
ああ、ぼくに分かるわけじゃないじゃないか!

太陽こそが、源ではないのか?
すべての生命の、すべての光の。
その源について何を知っているというのか
ぼくが、きみたちが、みんなが——なにも。

ヘルマン・フォン・ギルム

Ich schwebe, op.48-2

Ich schwebe wie auf Engelsschwingen,
Die Erde kaum berührt mein Fuß,
In meinen Ohren hör' ich's klingen
Wie der Geliebten Scheidegruß.

Das tönt so lieblich, mild und leise,
Das spricht so zage, zart und rein,
Leicht lullt die nachgeklung'ne Weise
In wonneschweren Traum mich ein.

Mein schimmernd Aug' -- indeß mich füllen
Die süßesten der Melodien,--
Sieht ohne Falten, ohne Hüllen
Mein lächelnd Lieb' vorüberziehn

Karl Friedrich Henckell

わたしは漂う 作品 48-2

わたしは漂う、天使の羽根に乗ったように
地に足が触れることはなく
耳の奥に聞こえている
愛しいあの娘の別れの挨拶が

その響きは、甘やかで、穏やかで、密やかで
その語りは、遠慮がちで、か細く、澄んでいて
やわらかに、余韻となって
歓びにはち切れそうな夢へと私を誘い込む

わたしの目はきらめいて、—この身を満たすのは
この上なく甘いメロディー—
何にさまたげられることもなく見る
ほほ笑むあの娘が、過ぎゆくのを

カール・フリードリヒ・ヘンケル

Ständchen, op.17-2

Mach auf, mach auf! doch leise, mein Kind,
Um Keinen vom Schlummer zu wecken!
Kaum murmelt der Bach, kaum zittert im Wind
Ein Blatt an den Büschen und Hecken;
Drum leise, mein Mädchen, daß nichts sich regt,
Nur leise die Hand auf die Klinke gelegt!

Mit Tritten, wie Tritte der Elfen so sacht,
Um über die Blumen zu hüpfen,
Flieg leicht hinaus in die Mondscheinnacht,
Zu mir in den Garten zu schlüpfen!
Rings schlummern die Blüten am rieselnden Bach
Und duften im Schlaf, nur die Liebe ist wach.

Sitz nieder! Hier dämmert's geheimnisvoll
Unter den Lindenbäumen.
Die Nachtigall uns zu Häupten soll
Von unseren Küssen träumen
Und die Rose, wenn sie am Morgen erwacht,
Hoch glühn von den Wonneschauern der Nacht.

Adolf Friedrich von Schack

セレナーデ 作品 17-2

開けて、開けて、そっとだよ、かわいい人よ
眠っている者たちを起こさないように!
小川のつぶやきだってこんなに静かで、
茂みや垣根の葉だって、そよもしない。
だから静かにね、いい子だから、なにも動かないように
扉には、ほんとうにそっと手を置くんだよ!

妖精さながらの軽やかな足で
花の上をさっとかすめて
月夜のなかへとひょいと飛ぶ
そうして庭にいるこのぼくのところへ忍び出るんだ!
川辺の花たちは、みなまどろんでいる
薫ってはいるが眠っている。愛だけが覚めているのだ。

ここに座って! ここなら秘密の暗さがある
菩提樹の影になってね。
頭上の小夜鳴き鳥は、夢見ることになろう
ぼくらが口づけするところを
そして朝になったら、夜の悦びの洗礼を受けた
あの薔薇が、あかあかと燃えるだろう。

アドルフ・フリードリヒ・フォン・シャック

„Säusle, liebe Myrthe!
Wie still ist's in der Welt,
Der Mond, der Sternenhirte
Auf klarem Himmelsfeld,
Treibt schon die Wolkenschafe
Zum Born des Lichtes hin,
Schlaf, mein Freund, o schlafe,
Bis ich wieder bei dir bin!“

„Säusle, liebe Myrthe!
Und träum im Sternenschein,
Die Turteltaube girrte
Auch ihre Brut schon ein.
Still ziehn die Wolkenschafe
Zum Born des Lichtes hin,
Schlaf, mein Freund, o schlafe,
Bis ich wieder bei dir bin!“

„Hörst du, wie die Brunnen rauschen?
Hörst du, wie die Grille zirpt?
Stille, stille, laß uns lauschen,
Selig, wer in Träumen stirbt;
Selig, wen die Wolken wiegen,
Wenn der Mond ein Schlaflied singt;
O! wie selig kann der fliegen,
Dem der Traum den Flügel schwingt,
Dass an blauer Himmelsdecke
Sterne er wie Blumen pflückt;
Schlaf, träume, flieg', ich wecke
Bald dich auf und bin beglückt!“

Clemens Brentano

「ねえ、愛しいミルテよ
この世はなんと静かなのでしょう
月が、星の羊飼いが
澄んだ天空にあって
雲の羊らを駆り立てている
光のみなもとの方へ
お眠り、友よ、お眠りなさい
わたしがここにまた来る時まで!」

「ねえ、愛しいミルテよ
星あかりに包まれて夢見るのよ
キジバトも喉をくうくう鳴らして
子らを寝かしつけている
雲の羊が静かにゆく
光のみなもとの方へ
お眠り、友よ、お眠りなさい
わたしがここにまた来る時まで!」

「聞こえるかい? 泉のさざめきが
聞こえるかい? コオロギの声が
静かに、静かに、耳をそば立てよう
幸いなるかな、夢のなかで身罷る者は
幸いなるかな、雲に揺られる者は
月が子守唄をうたっている
ああ、なんと幸みちて翔んでゆくことか
夢にさそわれて羽ばたく者は
青空で
星を花さながらに摘んでいる
眠って、夢みて、翔んでお行き、ぼくが
じきに起こしてあげる、それが嬉しいのだ!」

クレメンス・ブレンターノ

ブレンターノのこの詩は、„Das Märchen von dem Myrtenfräulein“ (『ミルテの精』) という童話から取られたものだ。ミルテの木に惚れ込んだ砂漠の国の王子が、その木を大事にしていた。ある晩、ミルテの木の中に隠れている妖精みたいな謎の生き物、ミルテの精が人間の女性の形をして現れて、王子と話をする。そんなことが夜な夜な七度も繰り返されて、そのうち妖精が歌いだす (=第1連、第2連)。その歌を受けて、今度は王子が歌い返す (=第3連)。何とも愛情豊かなメルヘンなやり取りだ。童話では途中悲しい出来事も起こるが、人間となったミルテと王子が結婚するハッピーエンドの物語。

ミルテはユーカリと同じ科で、やさしく香るらしい。ヨーロッパでは花嫁のブーケや髪飾りに使われるお祝いの木であり、また「マートルの精油」はこのミルテのことである。地中海沿岸が原産で、日本名はギンバイカ (銀梅花)。白い5つの花びらと、放射状にふわっと広がる数十本のおしべがなんとも可愛らしい花である。

Morgen, op.27-4

Und morgen wird die Sonne wieder scheinen
Und auf dem Wege, den ich gehen werde,
Wird uns, die Glücklichen, sie wieder einen
Inmitten dieser sonnenatmenden Erde...

Und zu dem Strand, dem weiten, wogenblauen,
Werden wir still und langsam niedersteigen,
Stumm werden wir uns in die Augen schauen,
Und auf uns sinkt des Glückes stummes Schweigen...

John Henry Mackay

明日になれば 作品 27-4

そして明日になれば太陽が また輝くだろう
わたしが往く道のうえで
わたしたち幸なる者を また一つにしてくれるだろう
陽の光を呼吸する この大地のただ中で...

そしてあの渚に 見はるかす 波の青にそまった渚に
わたしたちは静かに ゆっくりと降りてゆくだろう
ものも言わず わたしたちは互いの目を見る
そうしてわたしたちのものに降りてくる
幸福の もの言わぬ沈黙が...

ジョン・ヘンリー・マッケイ

Zueignung, op.10-1

Ja, du weißt es, teure Seele,
Daß ich fern von dir mich quäle,
Liebe macht die Herzen krank,
Habe Dank.

Einst hielt ich, der Freiheit Zecher,
Hoch den Amethysten-Becher,
Und du segnetest den Trank,
Habe Dank.

Und beschworst darin die Bösen,
Bis ich, was ich nie gewesen,
Heilig, heilig an's Herz dir sank,
Habe Dank!

Hermann von Gilm

献呈 作品 10-1

そう、きみには分かる、気高いひとよ
ぼくはきみから離れて苦しんでいると
恋は心を病ましむもの
どうもありがとう

かつて、自由を飲み干すぼくが
アメシストの盃を掲げたとき
きみはその飲みものを祝福してくれた
どうもありがとう

そうしてきみは悪しき者たちを追い払ってくれた
結果ぼくは、かつてなかったことだけれど、
本当に清い心で、きみの胸にこの身を埋めたのだ
どうもありがとう!

ヘルマン・フォン・ギルム

(ドイツ語訳: 船木篤也)

Elegia eterna

永遠の哀歌

La mariposa siente amor
por la más linda rosa del rosal
inquieta está la flor, apasionada
enamorada de la brisa matinal.

蝶は愛を感じている
薔薇園のいちばん美しい薔薇に
その花は落ち着かず 情熱に満ちて
朝のそよ風に恋している

La brisa, fascinada por la niebla,
desdén su pasión,
y la niebla, como una sombra errante
busca el río con la obsesión
amante de un corazón.

だが風は 淡い霧に心を奪われ
薔薇の想いを拒む
霧は さまよう影のように
ただ川を求めて歩みつづける その執念に導かれて
ひとつの心を愛し続ける

Mas ¡ay! qué ciegamente el río sigue
corriendo al mar su destino fatal;
la niebla, enamorada le persigue,
seguida por la brisa matinal.

ああ、それなのに川は何も見ず
運命の海へと流れを急ぐ
霧は恋い焦がれて川を追い
その霧をまた朝の風が追ってゆく

En el rosal no alienta ya la rosa
que al fin se deshojó,
ni alete a la frágil mariposa
porque sus ala plegó de amor se murió.

薔薇園ではもうあの薔薇は息づいていない
花びらはついに散りはて
かわい蝶ももう羽ばたかない
なぜなら愛のあまり死んでしまったのだ

Apel·les Mestres i Oñós

アペレス・メストレス

詩人のアペレス・メストレス (Apel·les Mestres i Oñós, 1854-1936) の父親はリセウ歌劇場などを手掛けた、バルセロナの建築家である。アペレス自身も、詩人であると同時に、画家・挿絵画家でもあった。ハインリヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797 Düsseldorf-1856 Paris) の詩をカタラーニャ語に翻訳もしている。

この詩はメストレスの詩集“Cants íntims 親密な歌” (1906) の“Esbarjos 気晴らし”という章に収められたもので、タイトルの通り「エレジー(哀歌)」——何かを悼む詩形式——であり、ここでは報われない恋を主題にしている。物語は自然の事物(蝶・薔薇・そよ風・霧・川)を擬人化して展開され、最初の蝶が(その想いを告げられないまま)命を落として終わるという寓意的な失恋詩である。ハイネの詩にも同じ発想の作品があるから、そこから影響を受けたのかもしれない。「報われぬ恋」「片思いの永遠の反復」というテーマ自体は、吟遊詩人の宮廷風恋愛詩の時代から連綿と続く、ヨーロッパ抒情詩の古くからの定型的主題の一つだ。

グラナドス自身が敬愛し、実際に影響を強く受けたと文献で明言されているのは、シューマン、ショパン、リストといった中欧のロマン派作曲家たちである。英語圏初のグラナドスの伝記 W.A.Clark の“Enrique Granados: Poet of the Piano” (2005) で、「グラナドスの精神はヨーロッパ・ロマン主義と分かちがたく結びついており、シューマンへの傾倒と、彼の世代の作曲家たちが発見しグラナドスが本能的な音楽的天才によって変容させたスペインの太古からの民俗的伝統の魂とが結びついている」と、ピアニストのアリシア・デ・ラローチャが序文で述べている。

本日はオリジナルのカタラーニャ語ではなく、スペイン語で歌う。なぜなら、この曲は、私のメンターでもあったマリアンネ先生 (Marianne Blok 1941Panamá-2021Amsterdam) の

レパートリーであり、彼女の歌と朗読で聴いたのが曲を知る最初だったからだ。スペイン物もいいなと先生の歌い口を勉強しようと歌いだしたのだが、なかなか手ごわい。歌う者にとってはエネルギーを要するかなりの難曲であるが、感情の放出が見事な、なんとも美しく悲しい曲だ。

音楽にとって一番大切なものは、先ず静か、という事である。そこから音楽が生れるのだから。

大昔、人間が音楽らしきものをはじめて持った頃、地球は非常に静かで、風、雨、波、川の音、動物の鳴き声、動く音の他は、何もなかった。

空気も水も、汚染されていなかった。きれいな空気、水、静寂の必要性は大昔も現代も変わらない。

絵を描こうとする時、キャンパス（画布）が非常に汚れていたり、既にもう何か描かれていたら、本当の絵はかけないのと同じように、雑音、騒音の中からは、本当の演奏も生まれない。（中略）

ところで日本では、音楽が、昔の言葉の、湯水の如く、ただ無駄に流すように使われている。喫茶店で、レストランで、ホテルで、街頭で、きいていても、いなくても、ただ音を流している。欧米の先進国では、このような音楽の使い方はない。文明国では湯水は、ただではないように、音楽もただではないからだ。（中略）

私は職業柄、この子に才能があるでしょうか、ときかれる事がよくある。専門的に見ると、色々な条件があるのだが、根本的には音を大切に、無駄な音、余計な音を出さない、きれいな音、きたない音の判別ができることが大切な条件である。・・・風鈴などを軒先につるして平気でいる家庭には、音楽的才能は先ず育たない。音と、静かさと、両方を大切に作る心が一番肝心なのである。

中田喜直随筆集『音楽と人生』（音楽之友社、1994年）より

サルビア

詩：堀内幸枝

サルビアは赤い花だわ
その花は血の色だわ
わたしはその花をみつめていたとき
急に愛の言葉を口にしたのね

夏の風はあったかいわ
嫉妬する熱風だわ
かん高い感情の中でとまどった
ふたりの顔に吹きつけていたのよ

サルビアのはなびらを
いっぱいふりかけてちょうだい
まっ赤な色にふちどられて叫んだ
あのときをもちど想い出したいの

さくら横ちょう

詩：加藤周一

春の宵 さくらが咲くと
花ばかり さくら横ちょう
想出す 恋の昨日
きみはもうここにはいないと

あゝ いつも 花の女王
ほえんだ 夢のふるさと
会い見るの時はなかりう
「その後どう」「しばらくねえ」と
言っただけはぢまらないと
心得て花でも見よう

春の宵 さくらが咲くと
花ばかり さくら横ちょう

「サルビア」は、深紅の花の色を血の色になぞらえ、愛の言葉を口にする瞬間の情熱と、そこに入り混じる嫉妬と不安を描く。

「さくら横ちょう」は、フランス詩にも造詣の深い医学者でもあった詩人加藤周一による、桜咲く春の夕暮れ、桜の美しさに触発されて失われた恋を回想する。フランス詩さながら韻を踏んでいる（が、あまり意味がないような）。さらに、桜横町は加藤周一が育った渋谷区界限。実際のある場所がある。その桜並木は第二次世界大戦で焼失してしまったとのことだが、今は歌碑があるそう。

私が二期会研究生をしていた大学院時代、中田喜直先生が公開レッスンで来られ、この曲のレッスンを同期生が受けた。「花でも見よ～」のところ、ヒラヒラと降りる音型、花びらが舞う様子かと思えば、なんと「歌舞伎の見得を切る」ところから来ていて、だから「しっかり歌ってください」とのこと。なるほど、だからテヌートが書いてあるのねと私は納得。前述の「サルビア」についても、ヒステリックに歌う人が多いけど、そうじゃあないんだなあ～と。私は優しく妖艶に？歌いたいかもです。

ゆく春

詩：小野芳照

ゆく春や
春の名残りの 惜しまれて

さくら
花よ 花よ
散る ちる ちる 風に

なよなよなびく 糸柳
影のほそさよ 陽もところろ

入相の 山里 近し
鐘の響きに
驚き 飛び立ち
飛び去る 蝶々

ああ 春は
春はゆくぞえ いそいそと

海ほおずきと少年

詩：岸田衿子

こんな夜明け
しのび足でやってくるのは
12歳のモーツァルトだけ

海ほおずきに
海はひろすぎて
海へもどることはできませんから

この世の中で 一番小さなラッパが
とてもわびしい音で なりひびくから
モーツァルトは困ってしまう

でも バスチア島にさよならしてきたので
ピアノにも フルートにもさよならしてきたので
ふしぎな楽器を手にとってみる

こんな夜明け
もし波うちぎわが よく見えたなら
もし海が まちかにきこえたなら
あの子がきているのです きっと

「ゆく春」は、晩春、過ぎゆく季節の郷愁を歌う。

「海ほおずきと少年」にはモーツァルトも登場するから、ピアノパートにはモーツァルトのピアノソナタ 16 番 C-Dur の旋律が用いられている。聴いたら、皆さんもわかるよ。私も弾いたことあるよ。「ゆく春」にも蝶々の旋律が入っているし。海ほおずきは日本の伝統的な海辺の子どもの遊び道具。

わたしの頬はぬれやすい
わたしの頬がさむいとき
あの日あなたがかいたのは
なんの文字だかしらないが
そこはいまでもいたむま

そこはいまでもいたむま
霧でぬれたちいさい頬
そこはすこしつめたいが
ふたりはいつも霧のなか
霧と一緒に恋をした

霧と一緒に恋をした
みえないあなたにだかれてた
だけどそれらがかわいたとき
あなたはあなたなんかじゃない
わたしはやっぱり泣きました

「霧と話した」は、失恋をテーマにした叙情詩。高原の林の中で恋人と過ごした際、霧の中で頬に指文字を書かれた記憶が今も体に残っているという回想から始まる。

山田耕筰

Yamada Kōsach (1886-1965 東京)

山田耕筰は東京生まれの作曲家・指揮者である。東京音楽学校卒業後、1910年から三年間、三菱財閥の援助でベルリン高等音楽学校に留学し、マックス・ブルッフに作曲を師事した。留学中は R. シュトラウスやワーグナーなど後期ロマン派の作品に深く傾倒し、その語法を吸収した。シュトラウスに作曲のレッスンを頼むが、法外なレッスン料をふっかけられ受けられなかったエピソードが自伝にある。実は弟子を取りたくないシュトラウスの作戦だったようだが。

日本に本格的な後期ロマン派様式を導入した作曲家であると同時に、日本初の管弦楽団創設など西洋音楽の普及に尽力する一方、日本語の抑揚（高低アクセント）を旋律に反映させる独自の作曲法を追求した。西洋和声に日本語の自然な語感を融合させ、日本語による芸術歌曲を創始した人物と位置づけられる。

歌曲集『風に寄せてうたへる春のうた』は、三木露風が 20 歳の時に詠んだ 8 篇の詩から、36 歳の山田耕筰が 4 篇を選び、1922 年 4 月に完成した全 4 曲の歌曲集である。「のちに若い友人の演出家土方（ひじかた）与志と梅子夫人に祝婚歌として捧げられているが、この昂揚した楽想の背後には、大橋房子との恋の始まりが仄（そく）見える。ともあれ、この連作歌曲は留学地ベルリンから帰国して以来の、露風との親しい交遊の記念碑的な作品であり、同時に、白秋の詩による《AIYAN の歌》とともに、山田が独創的な融合芸術を具現した、彼の作品群の頂点を標（しる）す作品でもあると思う」と、後藤暢子著『山田耕筰～作るのではなく生む～』（ミネルヴァ書房、2014 年）にある。山田は既婚で、再婚相手との間に長男が生まれたばかりであった。周囲の強い風当たりの中で、六甲山で心中しようというやりとりまであったという。大橋房子は耕筰の姉の秘書で、青山女学院卒の 23 歳のモダンガールだったそう。

「なるほど、この無茶苦茶な昂揚感はそういうことね」と、歌う者としてはちょっと呆れてしまう難曲である。

I 青木臥床をわれ飾る

青き臥床（ふしど）をわれ飾る。
春の戀ぐさ、種々（くさぐさ）の花をつくして、
また君がため白地なす
祝（ほが）ひの風の素絹もて、
熱き日光（ひざし）を避けまつらむ。

青々とした野原を私は飾りつけよう。
恋を呼ぶ春の草と種々の花をありったけ使って
そしてあなたのために 真っ白な
薄布のような祝福の風で、
熱い日射しをよけて守ってさしあげましょう。

II 君がため織る綾錦

君がため織る綾錦 春の被衣（かつぎ）の戀ごろも
眞晝となれば妙（たへ）に投ぐ あはれ床しき
風の梭（をさ）。

あなたのために織っている色とりどりの綾錦
それは恋の春を迎えたあなたが身につける衣装
真昼になると 巧みに投げながら
ああ なんと心ひかれる 風を切る機織りの道具。

III 光に顫ひ 日に舞へる

光に顫（ふる）ひ 日に舞へる
汝（な）が吹く笛の 調べこそ
戀するものゝ 心にか、
熱き涙と、あこがれと、
風はさあらぬ 節まはし。

光にふるえ 日に舞っている
あなたが吹く笛の音色は
恋する者の心に、
熱い涙と憧れを抱かせるのか、
それなのに風はなんでもないように吹いている。

IV たへよ、しらべよ、歌ひつれよ

たへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
春ぞ來（き）ぬると風の群、
たへよ、しらべよ、歌ひつれよ、
げににぎはへる戀幸（こひざち）を。
まことの幸を。

讃えよ、奏でよ、ともに歌おう、
「春が来たのだ」と風の群が告げている、
讃えよ、奏でよ、ともに歌おう、
とても豊かな恋の幸福を。
まことの幸せを。

（詩としてではなく、単に意味が分かるように書いてみました。）